

# 初年次教育における「作文の技術」の指導原理(その3)

## 「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の作例

川 崎 清

### 【1】「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の効用

初年次教育における作文指導では、最初に学生に「論文・レポートの書き方」を指導するのが常道である。それ故、本稿執筆者は学生に次の3点を重点的に指導した。①意見と根拠を一式セットにして文を書く技術、②それを束ねて段落とする技術、③その段落を論理的に破綻なく展開させる文章構成の技術、の3点である。その理論と実践について「経営論集第25巻第1号」で報告した。次に学生に「思想を物語で語る方法」を指導するのが学生の思考力を鍛えるのに効果的であると考え、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導原理を考案し、「経営論集第26巻第1号」で報告した。前回の報告では「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)指導の効用について、以下のように論じている。繰り返しになるが再掲する。

学生が「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)に取り組むと、どのような効用があるのだろうか。その点を以下で明らかにしたい。

その効用を一言でいえば、「他者視点の内面化」を意識的にできることである。文芸創作では、すべてのことばが物語の理解に貢献するように使用される。人物であれ場面であれ、読者(他者)に、どのような情報を、どのような順序で、どの程度提供すれば理解が可能となるか、作者は常に考えて叙述しなければならない。作者が一語一語記述するごとに読者(他者)の理解が組み上げられるように表現しなければならないのである。それは作者が、他者はどのような情報があれば当該の事柄を理解できるかを計測することである。作者にその計測を可能にするのが「内面化された他者視点」なのである。そして「内面化された他者視点」は、別言すれば、想像力の源泉、あるいは想像力そのものといえる。

ことばの指導では、ことばを論理的に使用しなければならない点を理解させることが一番重要である。この点は、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)と「論文・レポートの書き方」の両者において全く同じであり、不変である。「クリエイティブ・ライティング」では、「描写」であれ「説明」であれ、作者は「内面化された他者視点」を通して、つまり「想像力」を駆使して、物語(小説)世界を矛盾なく論理的に叙述し物語を進める。同様に、「論文・レポート」を執筆する際には、執筆者は、どのように論を進めれば、読者(他者)が理路をたどれるのか、「内面化された他者視点」を通して自分の論点を構築し論述を進めるのである。

ここで言う「他者視点の内面化」あるいは「内面化された他者視点」は、実は、我々は普段無意識

に発動させ実行しているのである。人の話を聞き、あるいは本を読み、我々はその内容を理解する。その理解が成立するのは、話を聞きながら、あるいは読みながら、我々が語り手や著者の視点から自分の内面に取り込み、その視点から事物や出来事を見ることができるようになるからである。

次の例で説明する。小売店で身内には「今日は5時で閉店する」で済ますところを、客に対する発話(掲示)では「本日は5時にて閉店させていただきます」とする場合である。「今日・は」に替えて「本日・は」、「5時・で」に替えて「5時・にて」とやや格式ばった語彙や表現を選び(語彙的選択)、「する」という一方的な宣言に替えて「させ・て・いただき・ます」と使役語、謙譲語、丁寧語を重ねて(語彙的選択)、正しく活用させて接続し(文法的選択)、伝達意図に沿った「許可を得て～します」の意味にする(意味的選択)。そして、表現全体を「場面に最適な」、客に対し失礼のない、丁寧な表現にする(語用論的選択)のである。このとき、これらすべての選択を統御しているのが、話者(書き手)の心内で発動する「他者から見れば、自分の発話はどう受け取られるか、という意識」である。発話の(書く)たびに、「他者から見れば、の意識」を発動させて、これら四つの選択を統御する経験を重ねることで、話者(書き手)は、自分の心の中に[他者視点]を「内面化」するのである。

以上の検討から理解されるように、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)では、学生は「書く」という能動的言語活動を通して、他者が理解しやすいように、ことばを正確に、そして効果的に使うことの難しさを体験する。それとともに、その難しさを克服し場面にぴったりの表現を組み立てられた時の楽しさも経験する。このような体験を重ねながら、他者に自分の認識や世界観を伝えるには、「他者視点の内面化」を図らなければならないことを自覚的に、そして徹底的に学ぶのである。

上記のことに加えて忘れてならない大事な点は、「他者視点の内面化」がなされる時、同時に「自己視点の自覚化」もなされることである。こうして、学生の頭の中で「他者視点と自己視点」が対照されることで、学生の「自己視点の相対化」が結果として実現する。つまり、学生は「自分のものの見方」が唯一のものではないことを体験として実感をもって学び取るのである。「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)は、このようにして学生の「ものの見方」を柔軟で複眼的なものにし、思考の幅を拡大するのである。(『初年次教育における『作文の指導原理』(その2)『経営論集』第26巻1号pp.94-96)

## 【2】「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の作例

以下に作例を提示する。内容は、高校一年生の男女が恋心を抱きあういきさつを描いた短編小説である。少しひねった点は、70歳になろうという男性が自分の高校一年生時代を回想して当時は叙述している点である。物語の時間が過去と現在とを往復するところもある。叙述は主人公の現在時から50年以上前の高校一年の2学期9月1日から始まり、それから50日のあいだに起こった出来事を日ごとに追う展開となっている。主人公のこころの動きに共感をもって読める作品になっているか確認していただきたい。

## 初恋

川浪博はあと数か月すると七十歳になる。彼は今になってなぜか高校一年生のときに同級生となったある女子生徒を思い出すのだ。川浪はその女子生徒と出会い恋におちた。それが川浪の初恋だった。当時川浪は島崎藤村の「初恋」を愛唱した。自分のころを詠んだ詩うたと**思**ったからだ。

やさしく白き手をのべて 林檎をわれにあたへしは  
うすくれない 薄 紅の秋の実に 人そこひ初めしはじめなり

川浪は今でも彼女との間で交わされたことばの遣り取りをはっきりと憶えている。それはもう五十年以上も前のことだ。しかし過去はただ流れ去った時間ではない。過去は誰にとっても喜びや悲しみ、そして切なさのしみ込んだ時間なのだ。だから過去はそれを生き直すことによって、今一度自分の生き方と向き合い、自分の歩んできた道を確かめられる時間なのだ。

川浪は遙か遠くになった自分の「人そこひ初めしはじめなり」の頃を生き直し、ここに深く刻まれたそのいきさつを見つめ直して、自分はどこから来て、どこへ行こうとしているのか自己了解したい気持ちになったのである。

## ◆九月一日（水）

二学期最初のホームルームの時間に彼女と川浪は学級委員に選ばれた。彼女は一学期に見せた授業中の教師との冷静な受け答えの様子、それに加えて成績の良さで選ばれたように思う。川浪の場合はもちろんそういう事情ではない。投票直前にクラスの悪友が「川浪が適任だ」とふざけて叫び、その結果、ふざけた投票行動がなされて選ばれてしまったのだ。

学級委員は一学期にはクラス担任に指名された者になった。クラスは異なる中学から進学した者の集団なので、誰に投票するべきか誰も判断材料を持たないからであった。二学期は一学期の様子でそれなりに人となりがわかった段階なので、委員は選挙で選ばれることになっていたのである。

## ◆九月三日（金）

学級委員となった二人は毎週水曜日五時間目にあるホームルームのメニューを決める必要に迫られた。女子の委員は名前を松村みどりといった。選ばれた二日後に川浪と松村みどりは教室で話しあっていた。

「川浪君、今度のホームルームの時間は読書会にしない」

「読書会？ そんな堅いことやるとみんな嫌がるよ」

「やってみないうちに決めつけないで。やってみれば、面白い展開になると思うわ」  
「松村さんは勉強できるし、本を読むのは好きそうだし、読書会は似合っているけれど、、、」  
「川浪君だって、現代国語の授業のとき、いいこと言っていたじゃない」  
「『アミエルの日記』のこと？あれはたまたま内容が自分のところに響いたんだよ」  
「そういう本は他にもたくさんあるわ。ところに響く本をみんなで紹介しあうのって面白いでしょ。だから読書会やってみない」  
「面白いと感じる人はいるかもしれないけど、松村さんのようにたくさん読んでる人はいないよ。だからあまり意見が出ないんじゃない」  
「そんなことないわ。川浪君が知らないだけ。西川茜さんはすごい読書家よ。寺門亜衣子さんも大越君もたくさん読んでるし」  
「わかった。それじゃ、今日の帰りのホームルームで来週の水曜日に読書会をするから、みんな自分の愛読書を紹介できるよう準備してくるように話すよ」  
「賛成してくれてありがとう。来週が楽しみだわ」

◆九月八日(水)

読書会が開かれる日になった。川浪は司会をし、松村は意見をまとめて黒板に書く書記役を務めた。川浪は意見が出ないことを心配していたが、思いのほか活発に意見が交わされて、読書会は何とか無事に終わった。それから六時間目の授業を終えて下校時に二人は下駄箱の所で偶然に行きあわせ、校舎から校門までの短い通路を歩きながら、今日の読書会について感想を述べあった。

「今日は関口奈美さんの話しが面白かった。女子は太宰治は嫌いだと思っていたけど『人間失格』が愛読書だなんて意外だった」  
「私は黒崎<sup>さとし</sup>智君が『異父兄弟』を読んで感動したという話に驚いたの。人間は誰でも後ろめたい気持ちを持ってるけど、普段はそれを表にださないだけという解釈が鋭いと思ったわ」  
「俺も黒崎の洞察力に舌を巻いたよ。だれでも誰かを犠牲にして生きているという自覚、つまり後ろめたさを持っているはず、という指摘は鋭いし、確かにそうだった」  
「川浪君の司会も今日は見事だったわね。意見が出ないとみると、自分から『車輪の下』が愛読書だと言って、自分の感想を話してくれた。それからよ、みんなが話しやすくなったのは」  
「『今日は』ってことは、いつもはそんなふうにはできないと思ってたってことかい」  
「そうじゃないわ、いつも上手にクラスの人をリラックスさせてくれるって思っていたけれど、今日もやっぱりそうしてくれた、って意味」  
「松村さんも冷静にみんなの意見を聞いていて、意見の交通整理をしてくれたね。今日も後ろめたさを自覚しないで平然と生きている人は人間失格なんじゃない、と言って、関口さんと黒崎の話をつなげてくれたよね」

「うまくつながって本当によかったわ。このような読書会はまた是非やりましょうよ。じゃ、私、母が具合悪くしているので今日は早めに帰るわ。今日はありがとう。また明日ね。さようなら」

◆九月十八日(土)

読書会から十日がたった。川浪と松村は示しあわせたわけではないが下校時に校舎の玄関口で再び一緒になった。今度は校舎を出て、最寄りの私鉄駅まで続く桜並木の道を歩きながら話した。

「川浪君、来週の音楽の時間の器楽実技試験は何をするの」

「俺はハーモニカと縦笛しかやったことがないんだ。多分、縦笛にするよ。松村さんはピアノを弾くんだよね」

「一応五歳から始めたピアノだから、弾くには弾けるけれど上手じゃないの」

「いいなー、俺なんかシャープやフラットが一つついただけで、もう音符が読めないんだ」

「関口さんと阿部君はヴァイオリンを弾くそうよ」

「彼らは育ちがいいからね。松村さんは高校卒業後は音大に行こうと思ってるの」

「音楽は大好きなんだけど、家が開業医でしょ。子供は私だけだから家を継がなければいけないの。だから音大へは進めないかも、って思っているわ」

「医者かー、俺には無理だけど、松村さんなら医学部に行けるよ」

「軽々しく断定しないで。私の理科系科目の成績も知らないんでしょ。知っていたら、そんな断定はできないわ」

「そうだね、無責任な言い方だった。でも、松村さんは生物で百点だったって一学期に先生に褒められていたじゃない」

「生物は暗記ものなのよ。文系科目と同じなの。数学、化学、物理、これらができなければ医学部には入れないわ。数学は私の大の苦手科目だし、悩んじゃうな」

「本当は音楽をやりたいなら、そう親に言えばいいじゃない。親が子供の進路を決める時代じゃないでしょ。医者の人と結婚して、婿<sup>むこ</sup>に入ってもらえばいいんだし」

「川浪君だって時代錯誤よ。私の結婚相手の職業を決めつけたり、婿をとればいいだの、古臭いわ。それにいろいろと人の家のことを勝手に決めたりして」

「ごめん、発言の後半は撤回する。でも音大進学を主張するべきというのは撤回しないよ」

「筋から言えば、川浪君の言う通りだわ。でも、私にも両親の期待<sup>こた</sup>に応えたいと思う気持ちがあるの」

「親は松村さんが幸せになることを望んでいると思うよ。医者<sup>いしや</sup>の跡を継いで欲しいと思ってもいるだろうけど、それで娘が悩んで不幸になるなら、無理に医学部に進学しろとは言わないんじゃないかな。ところでもし音大に進学したら、何をしたいの」

「ピアノは続けるけれど、コンサートで食べていけるピアニストにはなれないとわかっているわ。だから、音楽のことをよくわかっていて、それを上手に子供たちに教えられる先生になりたいと思うの」

「音楽の先生か、いいね。俺も小学校以来の音楽の先生を思い出してみると、たいていの先生は生徒の理解力のなさに匙を投げている人ばかりだった気がする。でも、俺に言わせれば、移動ト唱法だの、嬰ハ短調だの、もっとわかりやすく説明してくれば良かったと思うんだけどね」

「そこは理解させるのが難しいところなの。先生も苦労したと思うわ。音楽は理屈でわかる必要はないと思うのよ。聴いてすごく美しいと感じる、そして自分でも歌いたいと思える音楽があるってことを知ることが大切だと思うわ。川浪君の好きな歌は何かしら」

「浜辺の歌、夏は来ぬ、早春賦なんか大好きだね」

「その歌は私も大好き。そういう歌があれば、人は幸せになれるし、そういう歌は人のこころを生き生きさせ、慰めることもできる。私もそういう歌を作りたいわ」

「作曲家かー、それもいいね」

「作曲もしたい。そして、いまある曲がどのようにして生まれてきたのかも調べてみたいの」

「松村さんはクラシックが好きだから、バッハ、モーツァルト、ベートーベンなんかのことを調べるの？」

「そう、いまあげてくれた作曲家は年代も違うから、作曲する環境や道具が違っていたのね。例えばモーツァルトの時代にはピアノは五オクターブ六十一鍵のものしかなかったのよ。でもベートーベンの時代になると六十八鍵、七十三鍵のものも作られて、ベートーベンの晩年には七十八鍵のピアノも出てきたわ。でも彼はそれでも音が足りないと思っていたらしいの」

「英語で言えば、単語数が違うんだね。ピアノは最初から八十八鍵じゃなかったんだ。初めて知った。すごく深い知識を持っているんで驚いたよ。勉強になった、ありがとう」

「こちらこそありがとう。進路のことを話せてよかったわ、頭が整理できた気がする。それじゃ、明日また」

松村みどりはあまり交友範囲が広いわけではなかった。男子はもちろん女子でさえ、松村の育ちの良さからくる上品で堅い物言いを付きあいにいとを感じる者が多いからであった。それでも松村は女子であれ男子であれ、その者と付きあうだけのために、その丁寧な所作や物言いの姿勢を変えることはなかった。だからあまり人は寄り付かず、敬遠されている感じで、教室の窓側の列の一番前の席にいつもポツンと座っていた。そして自分の持ってきた本や教科書を読んでいた。とはいえ孤独で寂しそうに見えるわけではなかったが。

#### ◆九月二十七日(月)

九月の末になり、十月のホームルームのメニューをもう一度調整する必要がある、下校時に

川浪と松村は一緒に帰りながら相談しようということになった。

校門を出て最寄りの私鉄駅まで続く桜並木の道を二人で歩いてきたときである。松村みどりが突然「あーっ、川浪君、ちょっと来てーっ」と切羽詰まった甲高い声を発した。何事かと川浪が松村の方を見ると、松村が着ている白いブラウスの胸の真ん中にアブラゼミがとまっていた。松村は「早く、早くとってーっ」と声をあげ、両肘を体につけ、両手のこぶしを肩口まで上げて、胸を川浪の方に突き出してきた。川浪はゼミをとろうと咄嗟<sup>とっさ</sup>に右手をあげた。が、手を松村の胸に伸ばすまでにほんの一瞬ためらった。

なぜ、すぐにゼミに手が伸びなかったのだろうか。確かに川浪は白いブラウスにとまっている黒褐色のゼミを視野に入れていた。しかしゼミは見えていなかった。彼の目の中はブラウスの白色で一杯だった。だが彼の思いはその白いブラウスに包まれているものに行ってしまったのだ。ハッと自分のためらいに気づいて川浪は急いで視線を上げて松村の顔を見た。すると驚いたことに、松村みどりは大きく目を見開いて、川浪の顔をまっすぐにしっかりと見つめていたのである。川浪はその時、松村の瞳の中にいつも見ているものとは違う、初めて目にする輝きを見た。それは身体<sup>からだ</sup>とところの一番奥深いところから出ている輝きのように感じられた。その輝きは女の魂であった。その輝きを見た川浪の瞳には松村の顔が映りこみ、その映像の更に奥にはその時に呼び覚まされた川浪の男の魂が輝いていた。見つめあった二人の魂は瞬時に互いを認識した。次の瞬間川浪は右手をサッと松村の胸の中央に伸ばしてゼミをつかみ空中に放り投げた。ゼミはジー、ジーと鳴きながら弧を描いて高く飛び、木立の中に入り見えなくなった。

暦の上ではとうに夏が終わり秋に切り替わっていたが、西日はまだ夏の名残りをとどめる強い日差しで輝いていて、二人の顔を赤く染めていた。松村みどりと川浪は何も言わずに黙って歩き、互いに相手を見ることができないまま駅に着いた。「それじゃ、明日」と小さな声で言いあって別れた。結局ホームルームのメニューのことは何も話されなかったのである。

いま川浪は七十に手が届く歳になって、あの時の情景を改めて思い起こしている。すると、いくつか疑問に思えることがあるのだ。まず、なぜゼミがよりによって松村の胸の中央にとまっていたのかという点である。川浪は松村と並んで歩いてきたが、ゼミが松村の胸に飛んできたことにまったく気がつかなかったのだ。ゼミが木陰から別の木や電柱に飛び移っていくときには、それなりに羽音がする。しかし、あの時はその羽音がまったく聞こえずに、突然救いを求める松村の声が聞こえたのだ。不意に切羽詰まった声で呼ばれて驚いたことを憶えている。もしゼミがどこからか飛んできたのではなく、松村がゼミをどこからか取り出して、自分のブラウスの胸の真ん中に自分でゼミをとませたのだとすると、何のために松村はそんなことをしたのだろうか。それが川浪にとって一番解けない疑問であった。

松村みどりの行動をどのように説明するべきか、当時もそして当時を思い起こしている現在

も川浪は頭を悩ませている。しかしいま仮説として導き出した答えは次のようなものだ。あの日松村は歩きながら何気なく下を見ると、余命いくばくもないセミが地面を這っているのを見つけた。川浪は少し前を歩いていた。松村はすばやく<sup>かが</sup>屈んでセミを手に取り、そのセミをまるでアクセサリーを身につけるように自分のブラウスの胸の中央につけてみた。この推測があながち無理でないのは、松村は場合によっては医学部を受験することになるかもしれない人間であり、女子とはいえセミ一匹をいちいち怖がるとも思えないからである。そして、松村はセミをブラウスの胸の中央につけたときひらめいたのだ。「セミをとって」と隣にいる男子生徒に呼びかけることを。それは前もって立ててあった計画ではなかっただろう。いまが自分が何者であるかを知る機会だと本能に知らされたのだ。

松村は自分が女であることを幾度となく家庭や学校その他の生活場面で教え込まれ、それを学習してきた。しかし、学習できるのは社会化された性役割であり、その自覚に過ぎない。女子が女になるには男の魂と出会い、女の魂が自分の中にあることに気がついて、自分が女であることを改めて発見することが必要なのだ。その気づきと発見は学習メニューとして親や学校が教材化できるものではない。それだけは女子であれ男子であれ自分で機会を見つけ、自分で自己を発見し、女としてのあるいは男としての自己像を確立して成長していくしかないのだ。

あの時、松村みどりは川浪にセミをとるようにと声をかけた。そして川浪も言われた通り松村の胸の真ん中にとまっているセミに手を伸ばそうとした。しかしその時、川浪もそれまで意識していなかったことを不意に自覚したのだ。松村みどりの白いブラウスに包まれているものに思いがいったとき、自分は男だと自覚したのだ。その自覚が無邪気に手を伸ばすことをためらわせた。そして松村の顔を見て、目の前にいる女子生徒が女であることに気がついたのである。松村みどりもまた、自分の胸に手を伸ばすことに一瞬の逡巡を見せる男子生徒の瞳の中に男の魂を見た。その瞬間、目の前の男子生徒が男であることを悟ったのである。同時にその時自分が女であると改めて深く自覚したのだ。

川浪はあの時、もう一つのことに気がついてしまった。松村みどりはすれ違って人が振り返るほど人目を惹きつける女性ではなかった。だが川浪は松村みどりが「可愛らしい」ということばが似合う女子だとその時気がついたのである。

#### ◆九月二十八日(火)

セミ事件の翌日、二人は教室で顔を合わせた。気恥ずかしい思いはお互いに持っていたが、顔をあわせて何も言わないでいるのもおかしいので川浪が何か言おうとすると、松村みどりが先に口をきった。

「昨日はごめんなさい。セミにびっくりして大声を出して取り乱した姿を川浪君に見られちゃって、恥ずかしいのと情けないのが一緒になって、話す気力がなくなっちゃったの」

「俺の方がびっくりしたよ。いきなり『とってーっ』て叫ばれて胸を突き出されたんだから。女子に胸を突き出されたら俺のような純情な男はどうすればいいのかわからなくて凍りついちゃうよ。実際凍りついちゃって、恰好悪くて口がきけなくなったんだ」

「川浪君、いやらしいこと考えたんでしょ。ほら、赤くなってる」

「そんなんじゃないよ。胸に触らないようにセミをとれるか、瞬間に考えてたんだ。考えずに触っちゃってもよかったんだね。緊急事態だったから」

「やっぱり一瞬いやらしいこと考えていたんじゃない。川浪君もスポーツ新聞のいやらしい写真を見たりするの」

「見ねーよ、そんなの。それよりホームルームのメニューを決めよう」

「そうね。実は二年生の生徒会副会長森花子さんから制服廃止についてクラスの意見をまとめるように言われていたの。だから、来週の議題はそれにしましょう。期限も迫っているし」

「わかった。制服廃止だね。実を言うと俺は本当は制服がけっこう好きなんだけどね」

「案外保守的なよね、川浪君って。制服って皆同じものを着るから、その人らしい個性が発揮できないじゃない。名門校の人は制服と徽章で自分のエリートぶりを周囲に見せつけて得意になれるからいいのかもしれないけれど」

「でも制服を着るから個性が発揮できないというのは一面的な観察だと思うな。その人にしかない個性って、実は皆が同じものを着ているから、かえって見えてくるんじゃないか。それに自由に勝手な服を着ることが個性の表現というのも表面的だと思う。例えば松村さんの好きな音楽分野というなら、みんなが勝手な鍵盤数のピアノで作曲したら、どれが個性的な曲か判断するのが難しいんじゃない。そういうピアノで作られた曲って、個性じゃなくて、単なる気分や欲望の垂れ流しに過ぎないんじゃないか」

「わーっ、川浪君すごーい。聴いててすごく論理的な意見だと思ったわ。なるほどねー、鍵盤数の違うピアノで作曲することと制服を廃止して私服で通学することは結局は同じなのね。その対比はよく理解できるわ。個性は制約の中でこそ開発されるのね。悔しいけど説得されちゃった」

「今日はなんか俺、口数が多いよね。でも、制服をまったく廃止するっていうんじゃなくて、着たい奴は着る、着たくない奴は私服で登校してもいいっていう案もありうるね」

「そう、私はそういう意味での制服廃止論者なの。今日は川浪君の頭の良さにすっかり助けられたわ。議長側があらかじめこれだけ論点を考えておけば、クラスの意見をまとめられると思う。どうもありがと。それじゃ、今日はここまでにしましょ」

#### ◆十月二十日(水)

翌週川浪と松村は制服廃止についてクラスで議論をしてもらい、制服廃止賛成の結論を得た。そして十月二十日にあるホームルームの時間は生徒総会となった。全校生徒と教員が体育館兼講堂に集まり、生徒は床に体育座りでクラスごとに座り、教員は体育館の壁面に沿って置かれ

たパイプ椅子に座った。壇上に生徒会幹部が座り、生徒会長の三年生字賀治正志が開会を宣言した。

「今学期は各学年の各クラスで制服廃止について話しあってもらいました。その結果、三分の二以上のクラスが制服廃止に賛成という意見でまとまったと報告を受けています。従って、生徒会としては制服を廃止する方向で高校側に申し入れたいと思います。今日はこの生徒総会で念のためもう一度皆さんの意思を確認します。賛成または反対の意見を述べてください」

生徒会長から意見を促されても意見を述べる生徒は出てこなかった。しばし沈黙の時間が流れて、生徒側の意見が制服廃止に反対なしでまとまるかと思われたとき、一人の女子生徒が手を挙げた。彼女は指名されて立ち上がり、名を名乗った。

「二年B組の青山<sup>めぐみ</sup>愛です。私は制服廃止に反対です。確かに制服は皆が同じものを着るので個性を發揮したい人には不満だと思います。でも、皆が同じものを着ることにもいい面があることを知って欲しいと思います。例えば、制服を買えば、登校するための服はそれだけなので、毎朝いちいち今日は何を着ていくか悩む必要がありません。また、制服を買いそろえるお金だけでも大変な家庭があることを考えると、制服を廃止した場合、通学するための私服をいくつも買うことができない家庭の人は辛い思いをします。ですから、制服廃止で得られる自由と、制服存続で得られるお金のかからない学校生活とを秤<sup>はかり</sup>にかけた場合、私は制服存続の方がいいと思うのです」

生徒会長生字賀治は制服廃止で生徒の意見をまとめ、自分の会長業績とするつもりでいたので、青山の反対意見の表明にはかなり困惑した。しかし、今一度生徒たちに他に意見があれば言うように求めた。再び沈黙が流れた。その沈黙が長いと感じられそうになるまさにその時、川浪は青山<sup>めぐみ</sup>愛の意見にも一理あると思い、考えがまとまらないうちに立ち上がって意見を述べ始めた。

「一年C組の川浪博です。僕は制服に満足しています。いま僕は制服の下にパジャマを着ています。でも制服を着ていますから、正装していると思っています。制服はこのようにとても便利です。だから制服は廃止しないで存続してもいいと思っています」

論理的とはとうてい言えない意見であったが、川浪にはこれが精一杯であった。パジャマを着ているというところで失笑も起こり、緊張で張りつめていた空気が一瞬なごんだ。すると続いて松村みどりが立ち上がった。

「川浪君と同じ一年C組の松村みどりです。私は制服廃止論者でした。正確に言うと、制服を着たい人は着て、私服で通学したい人は私服でいいという意味での制服廃止論者でした。制

服を廃止して着衣の選択肢を広げることが自由につながると思っていたからです。でも、青山さんのお話を聞いてそんな単純な話ではないことがわかりました。ですので、制服を廃止せず、いままで通り生徒は皆制服着用で通学することでもいいと思います」

ややあって低い<sup>おえつ</sup>嗚咽の声が聞こえてきた。青山<sup>めぐみ</sup>愛が泣いているのであった。すぐに青山の友達と思われる数人の女子生徒が青山を囲み他人の視線を<sup>さえぎ</sup>遮りながら、抱えるようにして青山を体育館の外に連れ出すのが見えた。

生徒会長宇賀治は更に意見の表明を求めた。すると青山のクラスの女子生徒が全員立ち上がった。そしてそのうちの三人が次々に講堂にいる全生徒に対して意見を表明したのである。経済的負担が増える方向での制服問題の解決には反対だと。話し方に巧拙はあったが、三人の真剣さと必死さはその場にいるみんなの胸を打った。

宇賀治は更に意見を募ったが、それ以上は意見を述べる生徒が出ないので、採決することを宣言した。

「それでは採決をしたいと思います。制服廃止に賛成の人は挙手をしてください。各クラスの学級委員は人数を数えて生徒会執行部に報告してください」

制服廃止に賛成する者はほんの数名ほどになっていた。

「それでは制服廃止は時期尚早であると思う人は挙手してください」

するとほぼ生徒全員の手が挙がった。この結果、制服は廃止せず、これまで通り制服着用で通学するという結論になった。生徒会長宇賀治にとっては想定外の展開であったが、採決の際に「制服廃止に反対の人は挙手」とは言わずに「制服廃止は時期尚早と思う人は挙手」と言うことで、自分の問題意識の方向性は間違っていないと暗に表明し、何とか面目を保つ形となった。宇賀治としては、いずれ時期がくれば制服は廃止だから自分は正しい、と言ったつもりであった。

生徒会長宇賀治たちとの生徒総会の反省会に参加した<sup>あと</sup>後、川浪と松村は一緒に下校した。

「今日の生徒総会はなんか迫力のある会になったね。意味のある会だったと思う」

「青山さんの意見には本当に教えられたわ。川浪君も今日はすごく貢献していたわね。だって、あの意見で皆意見が言いやすくなったし、いろいろ、、、」

「今日も、って言って欲しいね。でも、さっき先輩が教えてくれたんだけど、青山さんは小学生のときに父親を病気で亡くしているんだって。だから、とても大変な思いをして高校に来

てるんだそうだ。それを青山さんのクラスの子はみんな知っているの、一致団結して彼女を守ろうとしたんだね」

「そういう事情の人もいるということに思いが及ばなくて、単純に選択肢が増えることが自由だと勘違いしていたわ。何もわかっていないで、正しいいいことをしていると一人でいい気になっていたの。そんな自分が恥ずかしい、、、青山さん、、、悲しい思いや辛いことを思い出し、私たちの無理解にも深く傷ついて、泣いてしまったんだわ。私、、、」

松村は急にことばを継げなくなって立ち止まり、川浪の方を向いた。川浪も立ち止まり、松村の顔を見た。松村の両目には大粒の涙が今にもこぼれ落ちそうになっていた。やがて絞りだすように松村がつぶやいた。

「私、わたし、青山さんにあやまりたい、、、」

川浪はしばらく何も言えず、突っ立っていた。そしてやっと次のように言った。

「それはしなくていいんじゃない。気持ちはわかるけど。松村さんは生徒総会で、自分の意見は制服を今まで通り着用して通学することでいいと言ったじゃない。それで十分だよ」

それを聞くと松村の目から大粒の涙が両頬をつたって流れ落ちた。

実を言えば、涙が松村の目からこぼれ落ちる直前に、川浪はどうしたらいいのか非常に困惑していたのだ。その時の困惑は当時の川浪の経験則に照らせば解答が得られて解消するという単純なものではなかった。松村がことばを継げなくなり、立ち止まって川浪の顔を見たとき、一体川浪は何をすればよかったのだろうか。川浪は松村の背中にそっと手を添えて共感を伝え慰めればよいのか、あるいは更に、添えたその手で松村の体をやさしく自分の方に引き寄せて、軽く抱擁すればよいのだろうか、そのような迷いが川浪の頭の中をその短い一瞬の間に駆けめぐっていたのである。結局、川浪はそのいずれをもできずに松村の前に突っ立っていた。その非常に悩ましい一瞬の沈黙の後、やっと川浪は松村のことばに応えたのである。

松村みどりはその後もう何も言わずにまっすぐに前を向いて駅まで歩いた。川浪も何かすべきだったという苦い後悔に心が満たされて、言うべき適切なことばも思いつかず黙ったまま松村の横に並んで歩いた。

以上が高校一年生の二学期になって、川浪博が松村みどりと話をするようになったいきさつである。九月一日から十月二十日までのわずか五十日余りの間に上に紹介した出来事があり、それらをめぐって以上に描写した会話がなされた。つい最近になって思いかえすまで、それら

は川浪にとって五十年以上前の遠い記憶の底に沈んでいる光景であった。しかしいまそれらの光景をよみがえらせ思案をめぐらすと、川浪にはとても気にかかることがあった。それは、あの時松村みどりは川浪に何を期待し望んでいたのだろうか、ということなのである。

川浪も松村も自分たちはここで思いあう以上のことはまだ早すぎるという自制心を持っていた。しかし、明確に自覚してはいないものの、互いに相手には自分を異性として意識して欲しいところの中で望んでもいたのである。相手を互いに異性として認め、互いへの好意を自然に示しあう恋の関係になることを切望していたのである。

はっきりとは自覚されていないそのような動機から、松村はセミをブラウスの胸の中央に自分でとまらせて、それをとるように川浪に求めた。そして、川浪がどう応じるかしっかりと見ていたのである。川浪はためらいながらも松村の求めに応じ、松村の望む反応を示した。川浪もその時自分が男であるとの自覚を触発され、互いに交わした視線の中でその自覚を松村に伝えることができたのである。

制服廃止問題のときには、松村は自分の至らなさのせいで人を傷つけたことに気がついて反省し、両目に涙をためて川浪を見つめた。その時は多分、松村は川浪にことばで慰める以上のことを期待していたかもしれない。しかし、松村からの抱擁しゅうようの慇懃けんけんとも思われる気配に川浪はことばで応えることしかできなかったのだ。愛しあうにはまだ早すぎるという川浪の自制心が相手の体に手を触れることを強くためらわせたからである。松村にしても自分の期待が叶えられなかったことにあわ淡い失望を覚えたことであろう。が同時にホッと安心した気持ちになったのも事実だったに違いない。

瞬時互いを見つめあった後あと、高校一年生の二人は駅までの道を何も言わずに黙って歩いた。その時に何をすべきであったのか、なぜできなかったのか、そのような迷いと後悔で二人のころは一杯であった。しかし同時に二人は互いの瞳の中に、あと一歩で恋人どうしになれるという予兆を見てもいた。

いま、川浪の脳裏には暮れ残る秋空の下を歩くその時の二人の姿がよみがえり、ころころには当時感じた恋の予感とときめきが再び満ちあふれてくるのであった。

完 (11982字)

## 創作ノート

青春小説の王道である初恋を描いた。本作の焦点は川浪博と松村みどりの恋のなれそめである。五十年前は、恋愛において男子は肉食獣のごとく女子を捕食するよう振舞うことが社会通念であった。しかし、本作では、最初に事態を動かしているのは川浪博ではなく、松村みどりである。セミ事件においても、ブラウスの胸の真ん中にセミをとまらせて川浪にとってくれと求める。作中では、この行動は事前の計画ではなく、松村のひらめきであり、本能がそうするように松村に知らせた、となっている。また、生徒総会の後一緒に下校する途中で、松村は大粒の涙を目にためて川浪を見つめる。そして涙を流す。これも松村の行動である。そしてこの行動も事前に計画していたとは考え難い。ここで涙を流す心理的必然性があるからだ。松村は制服を買いそろえるだけでも苦しい家庭で育った生徒の発言を聞き、自分は何でも与えられる環境で育ったことを自覚させられる。同時に松村はその格差の現実は無頓着でいた自分の罪深さも自覚するのである。そしてはからずも涙が出てくるのを抑えられないのだ。

もし松村が川浪に対してとる上記の行動が事前に計画された意図的なものであるとしたら、本作は書かれる必要はなかったであろう。松村は川浪におもねているのではない。松村みどりの意図せざる行動は結果的に巧まざる媚態として機能してしまうのだ。そして川浪はそれにどう応じるべきか迷うのである。今のことばで言えば、松村みどりが「肉食女子」として振る舞い、川浪が「草食男子」として戸惑っている姿が描かれている。

高校一年生という段階では、女子の方が男子より心身ともに早熟であり、自分の性的成熟に対して自覚的である。やや下品な言い方をすれば、悪気はないが、女子は自分が男の気を惹ける女か否か試す行動に結果的に出てしまうことがあるのだ。本作における松村みどりの川浪に対する行動もそのように解釈されるべきであろう。育ちが良く教養のある女子でも巧まざる媚態を示すことがあるのである。松村みどりは、川浪に対して自らの心身の成熟に促されて、巧まざる態度(結果として何に対しての態度になるのか自分でもわかっていない)をしているのである。男子は女子からのそのような態度に戸惑いながら、次第に、その態度に自然に応じることができるようになっていくのだろう。

本作は時代の変遷によって変わることのない恋愛感情萌芽期の男女の微妙な心理と行動を書き留めようとしたものである。諸氏のご高読をお願いする次第である。

### 主要参考文献

石黒圭 (2010)『「読む」技術』光文社新書

大沢在昌(2012)『小説講座 売れる作家の全技術』株式会社KADOKAWA

川崎清 (2015)『初年次教育における『作文の技術』の指導原理とその実践』  
『経営論集』文京学院大学経営学部紀要第25巻第1号、pp.27—49.

川崎清 (2016)『初年次教育における『作文の技術』の指導原理とその実践』(その2)

- 「経営論集」文京学院大学経営学部紀要第26巻第1号、pp.85—105.  
川西政明(2004)「小説の終焉」岩波新書  
後藤明生(1983)「小説—いかに読み、いかに書くか」講談社現代新書  
丹治愛(編)(2003)「知の教科書 批評理論」講談社選書メチエ  
中条省平(2002)「小説の解剖学」ちくま文庫

(2017.10.3 受理)